

## 『フランス語』

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

## 1 前文

2026（令和8）年度共通テストの『フランス語』は、2020年まで実施されたセンター試験の枠組みを受け継いだ2021年からの「共通テスト」を踏襲し、『筆記』試験を課し、リスニングテストは実施しないという方針の下、作成、実施された。

共通テストになって6年目の今回のテスト結果は、受験者87名（昨年度116名）、平均得点は100点満点換算で55.96点（同65.29点）、最高98点、最低0点（同100点、8点）であった。共通テスト5年目の節目に実施5年間の平均点の平均を算出したが、63.12点であった。依然としてセンター試験時代のレベルではなかったのである。（センター試験時代のフランス語平均点の、最後の5年間の平均を算出すると70.55点になる。）

出題形式については、昨年度を踏襲している。今年度のフランス語共通テストも、基本事項を丁寧に向う工夫のある問題で、発音、語形変化における不規則なものについても、おおむね中等教育レベル内から出題されたが、内容については応用志向が強く感得される問題が多かった。

フランス語の運用能力を幅広く問うという共通テストのねらいを体現した出題としての工夫と受け止めているが、思考力を問うために解答までに多くの段階を必要とする出題が増えることは、過去との公平性の観点からも望ましくないといえよう。試験時間の増加がないまま、解答に時間がより多くかかる出題が増えていくのであれば、受験者への不利益に繋がりにかぬない。

## 報告の方針

今回の報告は、上記の点を踏まえ、次の4点を分析の中心とする。

- (1) 受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか、ということを中心に検討したい。少数の集団が対象であるだけに、その点に関しては大人数の科目以上に要求が強くなるが、御理解を賜りたい。
- (2) 特定の要素に偏らない、総合的な学力を問う問題であったか。
- (3) 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。
- (4) フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。

なお、評価に当たっては、15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

## 2 内容・範囲

フランス語を高等学校から選択学習する高校生の学習環境を考慮した問題作成を希望している。主な形式と内容は共に昨年度の共通テストを踏襲したものであった。

第1問 フランス語におけるつづり字と発音間の規則性を理解しているかを問う問題である。基本ルールを問う傾向が続くことを望む。

問1 語中の *-ill-* の音、問4 単数名詞の語尾にある *-s* の発音を問う問題。基本語が出題された。

問2 語末の *-fs* の発音を問う問題。③ *œufs* は例外的基本語といえるが、語の実際の運用時には冠詞など限定詞と共に発音されるものであろう。実用面を考慮した出題を望む。

問3 語頭の *des-* を問う問題。④ *dessus* は例外の代表的単語。

問5 従来リエゾンを扱う枠であるが、*h muet*（無音のアッシュ）を絡めた、考慮する要素が

複数ある問題で、正答率は大変低い。

第2問 派生語の知識、動詞の活用、語形変化、などを扱う単語レベルでの総合的な文法問題である。

問1 動詞 *souffrir* の直説法現在形が提示され、その過去分詞を問われた。この例外的な語形変化をもつ動詞としては他に *ouvrir, couvrir, découvrir, offrir* が挙げられるが、出題された *souffrir* は同じ変化をする動詞の中の4番手、5番手にあたるものであり、出題に先立つ *finir* との関係からも見誤りやすく厳しい出題だった。正答率は極めて低い。

問2 問3 動詞から名詞への変化を問うもの。基本問題である。

問4 形容詞の女性形の例外を問う問題。この珍しい同型変化は他に *fou - folle* があるが、出題の *mou - molle* は、受験者の多くにとっては身近な語彙ではなかった。

問5 形容詞につける接頭辞による反意語を問うもの。知識の正確さが問われた。

第3問 文中の空所に適語を入れる形式で、文法や語法の理解度を測る問題である。一昨年度から問題数が2問減っている。

問1 不定代名詞を問う問題。否定文であることや、付加形容詞が比較級であることも考慮する必要があった。

問2 代名動詞の過去分詞の一致、問4は形容詞の補語部分の中性代名詞で受ける基本を問われた。

問3 *visiter* + 直接目的語の構文と、*compter* + *inf.* の構文を絡めて問われた。

問5 空所の直後が動詞である文の形式からの判断であろう、④ *qui* を誤答する受験者が多かったと推察する。関係節の中が倒置されることもある、という正解② *où* を選ぶためには、読解力だけでなく、文の形式へのより深い理解が要求される。正答率は低い。

第4問 引き続き、文中の空所に適語を入れる第3問と同じ形式で、語彙の理解度を測る問題。今年度の出題には考慮すべき要素が複数重なり、選択肢には迷いを深める多義性を持つ語が並ぶような広く深い理解を求める問題も多く、全体として正答率はとても低かった。

問1 出題の *à peine* は、使いこなすには高いレベルを必要とする語句である。正答率は低い。

問2 出題文にある *service* だけでなく、選択肢にあるどの動詞も多義性を特徴とする語で、名詞 *service* との相性を問われ迷ったと想像できる。

問3 *ça ne m'arrange pas* の表現への知識が問われた。*arranger* の基本語訳からの類推は難しく、④ *me fait* に誤答した可能性が大きい。

問4 受動態過去の文型の理解、さらに「フィルムをまわす」の表現が *rouler* ではなく *tourner* であること、など扱う要素が多く、正解に至りにくい。仏検レベルだと2級以上と思われる。

問5 正解① *convient* が使われている複数の辞書の中の例文と、主語・目的語が逆さになっている出題だった。辞書の例文を知っている者こそ、別の動詞に解を探した可能性があり、学習を進めている者がかえって誤答する問題だったかもしれない。別の選択肢の中には扱いにくい *devoir* もあり、迷いを深めたと想像できる。正答率は大変低い。

第5問 対話文を完成させる問題であり、4技能の総合的な育成が求められている中で、会話体の出題にもますます工夫がされていることと推察する。高校生に親しめる状況設定を望む。

問1 問2 問5 丁寧な読解から正解できる。他の選択肢にひどく紛らわしいものはない。

問3 フランボワーズのタルトを手作りする経験はなくても状況設定は理解し易い。使われている時間表現も平易だが、② (誤答) にある *disponible* は要注意語。

問4 関わる代名詞から、やりとりの空所を選択する問題だが、② (誤答) にある *être reporté(e)* の意味を汲むのはカタカナ語「レポート」に引きずられて易しくない。

第6問 整序作文。和文仏訳で、自らの考えを述べる自由作文の前段階として、文法や構文を中心とした作文力を問う問題である。並べ替えの語(句)の単位は6個、問うのは4番目の語(句)というルールで統一されている。日本語とフランス語の間の発想の違いが問題のポイントになると難易度が上がる。文頭と最後がフランス語で示されることで、出題ポイントがはっきりするこの形式の継続を望む。

問1 croire + inf. の inf. 部分が複合形であることがポイントとなる。

問2 非人称構文の inf. が否定形の語順を問う問題。問5の comme si の後の半過去形は記憶すべき構文である。問1と並んで基礎力の大切さを受験者に伝える良問。

問3 名詞の後に続く付加形容詞が最上級であるときの語順を問われた。定冠詞の処理にまごつく可能性がある。主語が人でない connaître の使用も定着しづらく、正答率は低い。

問4 prévenir A de B の構文。直接目的語が日本語で必ずしも「～を」でない出題は、慣れていれば整理できるが、難しい。

第7問 情報処理能力を問う問題で、与えられた情報から判断し発信できるかが問われている。今年度はA「レンタル市民農園」、B「海辺のイベント」が主題に取り上げられていた。AもBも説明文と図表の量が多く、また出題文のフランス語も見落としなく読まなければならず、時間が足りない可能性が否めない。

A 「レンタル市民農園」案内文にある déposer vos projets や un potager などの語彙で、立ち止まる受験者がいただろうが、しっかり読むことで新しい語彙の理解を進められた、と思われる。

問4 ①が適当でないことが分かるには、laisser des plantes の意味を知らないといけない。③は autant d'années que l'on veut が契約更新最高5年に相反すること、⑤は二つのタイプの違い、⑥は家庭菜園タイプの設備、を理解することが求められた。

B 「海辺のイベント」環境保全に直結する奉仕活動や娯楽に徹するものなど様々なプログラムが提示される。思い込みなく素直に読むことが肝要であろう。

問1 il faut s'inscrire ? に Oui, で受けながら obligatoire ではなく conseillé と解答すべきことは、資料に明記されている。読むことで正解に至るとはいえ、il faut ~ ? と尋ねられた際の受け答えの Oui, については、obligatoire が一般的な解釈なのではないか。受験者の迷いを想像する。

問2 資料からは、海岸掃除参加者に食事が offert 提供されると読める。が、問2に登場する遅れてきた Stéphanie は食事ができるかどうか明記されないまま、通信相手の Tom が、腹ペコだ早く来て、と Stéphanie を急かしている場面が描かれた。Tom がそういうなら食事が可能だ、と想像するしかないことなのか、自分の解釈が間違っているのかと、受験者が確信を持ってないまま先に進めにくかった可能性がある。問2では、「向かうべき場所」が出題内容であり、正解①「受付」を答えるのは難しくないが、読み解く中で解決できないわだかまりを抱えながらの解答となっただろう。問4にも引きずることになる内容である。(食事は海岸掃除参加者にのみ提供される、とも読める。有料でなら食べられる、ということは資料には明記されていない。)本質ではないところで資料を読み返さざるを得ない、余計な時間を必要としたと想像する。

問3 ①(誤答)の à mains nues は解釈が難しかった。

問4 資料と会話文についての、出題文の正誤を問う問題。登場する二人の高校生は、① concours de costumes に時間的には参加(観覧)できるけれど年齢制限があるので参加(出場)できない、という条件を読みこみながら、réservé や participer の意味を汲む必要が

あった。難易度は高い。もう一つの正解⑤は、上記の問2に続く、「海岸掃除協力者が無料で食事できるかどうか」を読み解く必要があった。問4の正答率は極めて低い。

①と⑤を正解とし他の選択文は誤答と確信するためには、多くの提示状況をクリアにする必要があり、資料読み解きを課題とする出題としては良問に違いない。けれども、複数要素を絡めた捻りのある、さらに曖昧な要素を含んだ、解答により時間がかかる問題でもあった。共通テストは限られた時間の中で取り組むものである。取り組んだ者が、読解力・表現力を適正に評価されるストレートな問いを望む。

第8問 長文読解。今年度は、環境に配慮して長距離の移動を飛行機ではなく鉄道を推進する動きの、一進一退について考察したエッセー。日本でも話題にするべきテーマと思うが、国内移動についても未だに取り組みが始まらない現状がある。日本在住の多くの受験者にとっては、耳新しいテーマだっただろう。知っている者にとっては、先を読み進め易いアドバンテージがある問題だった。

問1 始まり部分の具体例の理解をはかる問題。

問2 [a]は *faibles* と *importantes* の2択だが、後者の「分量が多い」の語義の知識がポイント。*faire la promotion* [b] , は *la promotion* の意味を考えるなら、『○○の』地位向上の意味から *du train* を選べる。が、正解に至るのは難しい。

問3 飛行機利用か鉄道利用かの対立があること、そして、鉄道がより環境保護に相当であると読めると正解に至る。このテーマを知らなかった者には新しい発見として意義深いだが、流れの先を読めないことから、フランス語力とは別の所でのハンディとなった。

問5 文章の流れを汲めれば、正解② *Cependant* を想定できる。が、他の選択肢が *cependant* とは別の役割をする接続詞である確信は難しい。④ *Du coup* は、ある辞書では(話)の記述があり、書かれたものを頼りに学習している受験者たちの手に届く範囲であるだろうか。このような繋ぎの語句を選ぶ力は受験者が目指すところだが、4行下の *elles* が何を受けているのかの理解を求められてもいて、難易度は高い。

問6 「下線部⑥の具体例として本文中に示されていないもの」を問われた。正解④にある「若者向け割引システム…」については行を割いて語られているので、示されている、と判断すると誤答に結び付きやすい。また、選択肢が「…が難しい」または「…が○○でないこと」と否定内容で提示され、一筋縄ではいかない出題だった。

問7 [c]の2択の *aisé* と *difficile* の語彙は平易でも、その判断を問う *se faire rembourser le reste du voyage* には使役表現も加わり、判断が難しい。[d] *les voyageurs* は *contrôler* する方向ではなく *protéger* する対象であると意味を捉えきれなかったか、正答率は芳しく無い。

問8 内容一致問題。用いられている単語、熟語とも比較的平易なものであるが、知らない話題を読み解く際に起こりうる、2次的な情報の見落としに注意喚起が必要だろう。例えば、出題文の⑥(誤答)「若い起業家たちが、鉄道の旅行を簡単にするための団体を作った。」について、主格や目的に注目するあまり、作ったのは「団体」ではなく「インターネットサイト」であることを見落とす誤りがあった。

問9 「本文全体」のタイトルという点で、今回は読み込んだ者が正解にいきつく問いだったか疑わしい。③(正解)の「鉄道：若者たちにおける成功への道！」は、環境保護目的であることや国を跨いで取り組みに言及されていないことで、本文全体のタイトルとは言い難いように思う。特に①(誤答)の「いかに世界的規模で環境保護を目指すか」は、大げさな言い方とはいえ、一般向けにつながる政策や何のための取り組みかに言及されていて、*Penser globalement, agir localement.* のセンスにつながる希望あるタイトルである、という見方を無下

にしづらいのではないか。

### 3 分量・程度

一昨年度から変更となった、第3問と第4問の問題数及び配点の減少と、第7問と第8問の問題数及び配点の増加という配点の移動は、解答する立場としては「分量の増加」と言える。第7問と第8問の資料読み取りおよび長文読解という思考力を測る目的の出題の増加は、そのまま解答により多くの時間を取られる出題の増加にあたるからだ。緩やかな変化とはいえ、限りある時間枠でのこの変更は受験者への不利益に繋がりにかぬない。試験制限時間の増加がないままのこうした傾向が定着することは見過ごせない。

### 4 表現・形式

基本的な問題、例外を扱った問題、応用力・読解力を必要とする問題をバランス良く出題する意向は読みとれる。が、素直にフランス語を読み解き解答を求める問いの重要性は、より重点を置かれるべきと考える。「〇〇でないものを選ぶ」という、解答をより難解にする問い方は昨年度姿を消したが、今年度再び登場した(第8問, 問6)。「最も適当な〇〇を選ぶ」ストレートな問い方が、受験者に知識や読解力を的確に問うことになるだろう。

その上で、今後の出題に関して以下の点にご考慮をお願いしたい。

まず、報告の方針(1)にあるように、受験者が深く考えた結果、不正解になってしまうような問題は避けていただきたいという点である。具体的には2点あり、第一は第8問の間9である。情報量を減じて、識別力のある問題文となり得ると思われる場合には、よりシンプルな文にしていきたい。第二は第7問の間2および間4である。複数要素を絡めた捻りのある、さらに曖昧な要素を含んだ、解答により時間がかかる問題であった。基本的な問題の出題方針を今後も維持していただきたい。

以上、細かい指摘となって大変恐縮ではあるが、ご考慮いただければ幸いである。

### 5 まとめ

共通テストは、高校生にとって基本的には1回限りの受験である。私たち高校教員は、毎年、彼らから試験問題についての感想や意見を聞く。評価委員になれば、そうした生徒側の反応の一端を作問委員の先生方にお示しできる貴重な機会に恵まれるが、同時にそこには責任も伴う。過去と同様のレベルが維持されているかどうか、難化していないかどうかを確認するために、受験者の目線で試験問題に対峙するという責任である。

問題ごとに見ていけば、難化と呼ぶのは適切ではないのかも知れないが、多くの大学が共通テストを基礎学力の識別を行うテストと位置づけていることを踏まえれば、やはり今年は、応用レベル寄りの問題、また解答により時間がかかる問題が散見していたことは否めない。

フランス語受験者の層がセンター試験および共通テスト全受験者の上位層であることは、歴代の評価委員たちがくり返しお伝えしてきた。英語よりもフランス語の平均点が高くあるのは、難度が低いのではなく母集団の違いと説明できるからである。フランス語は共通テスト利用のみという大学は、概して人気も高く、必然的に受験者の実力も上位である。国立大学についても同様であることは言うまでもない。こうした状況は、今年も変わらないと推察できる中で、今回の平均点の低さを見れば、原因はやはり問題の難化にあると考えざるを得ない。

つまり、この数年の出題はバランスのとれた問題であったと評価はしてきたが、もっと基本重視の出題であるべきなのではないか、とお伝えしたい。それこそが現実の受験者の力を適正に点数化

するものさしになるだろうと考える。よく取り組んだ者が適正に評価される、テスト本来の目的に沿った良問の増加を望む。

フランス語を第一外国語として履修できる高等学校同士は、お互いに連絡を取り、情報を共有するよう努力を続けている。どの学校も抱える喫緊の問題は、「大学受験科目としてのフランス語」が今後どのように変わっていくのかである。教育改革の荒波の中で、情報が得られにくい科目をあえて選ぶ、知的好奇心に満ちた若者たちが育ってきている。「英語も」学習した「フランス語」受験者は、物事に対してよりグローバルな視野を持っていると言える。多様性の重視が自分たち世代には欠かせないという感覚をすでに持ち合わせているのだ。

要望は以下のとおりである。

1. まずは、まっすぐに正解の選択肢にたどり着ける問題にしていただきたい。とはいえ、マークセンス方式のもつ性格上、難解な問題であれば、消去法によって正答に行きつくことはありうる。この場合も、確かな知識と理解に基づいて「消去」するのであれば、これもまた識別力の測定に資することは否定しない。けれども、真の識別力を測るには、自信をもって正解を選べることが望ましい。そのためには、基礎レベルでの出題をお願いする次第である。
2. 海外生活の経験がない高校生であっても解ける問題にしていただきたい。もちろん、日本にいても会話表現やコロケーションを様々な媒体を通じて知ることは可能である。とはいえ、あくまでも学習の場で学んだものであり、実生活のなかで身につけたものではないので、知識は限定的である。一般的な高校生にとって、その種の知識を問う問題は、考えて解ける性質のものではないという意味で「難問」である。
3. 多くの問題に見られたような、基礎的な知識を問う識別力のある問題を今後もさらに増やしていただきたい。1. 2. で触れた応用的な問題は、量的には決して多くはないのであって、大多数を占めたのは、基礎的な問題であった。その比率が今後もさらに上がることを期待したい。

この場をお借りして大学関係者の方々にお願い申し上げたい。ぜひ「フランス語」受験者の大学入学受験機会の増大をご検討いただきたい。こうした知的好奇心・学習意欲にあふれた生徒の受験機会が増加に転じることで、「フランス語」受験者が増加し、大学に一層の多様性がもたらされることを願う。各大学が多言語試験を実施することは、日本の教育のグローバル化を進める一助になる、と確信する。

そして、その際は「共通テスト」を利用していただくことができる、と繰り返しお伝えする。共通テストは、受験者の実力をはかる識別力の高い問題である。その共通テストを現在のみならず将来のフランス語学習者のためにも、大学教育の入口として今後も幅広く実施・利用していただきたい。